

KBS 京都賞

「人間の無責任な行動によって失われた命 ～犬猫の殺処分について～」

向日市立西ノ岡中学校 3年
大城 みなみ

私が五歳の頃、公園のブランコで遊んでいると、少し離れた木陰に大きなダンボール箱を見つけた。そういえば、私が公園に来た時にこのダンボール箱をかかえて入って来た少年がいた。しかし、その少年の姿はもうなかった。母が、
「あのダンボール箱さあ、さっきのお兄ちゃんが置いていかはったやつやんな。もしかしたら、中にネコちゃんかワンちゃんが入っているかも。」

といわれた瞬間、お兄ちゃんが走り出しそれを追って私もおぼつかない足取りで精一杯走った。興味津々で箱の中を覗くと、生まれて間もない六匹の子猫が入っていた。白猫や二匹の灰色の猫と三毛猫、そして黒猫。その中には眼脂で目が開けられない猫の姿もあった。私とお兄ちゃんは最初、可愛い、飼いたいなという気持ちの方が強かったけれど、見ているうちに捨てられてしまったと知って悲しくなった。同じ気持ちの母が、目が開けられない猫の眼脂を優しく拭きとってあげていた時、横にいたお兄ちゃんが足元に歩いてきた黒猫を突然自転車に乗せ、近くの祖父母のお店に走り出した。私もあわてて追いかけた。その後、私達はその黒猫を飼うことになり、「くうちゃん」と名付けた。

丁度その日、テレビで「志村動物園」を観て、野良犬猫が殺処分されてしまうことを知った。何も悪い事をしていないのに、人間の無責任な行動によって飼い主が見つからない犬猫が殺されてしまうのだと思うと私の心には、悔しさと怒りが芽生えた。

翌日、残りの五匹が気になり公園に向かったが子猫の姿はもうなかった。誰かが拾ってくれたのかもしれないが、目が開けなかった子はどうなったのかな。もしかして保健所に…。と思うと胸が苦しくなった。この日から私は、家族になったくうちゃんを他の五匹を救えなかった分まで大切に育てよう決心した。せめてこの子だけでも幸せにしてあげたいと思ったから。

罪のない犬猫が殺処分されるのは大抵がペットを手放した人間の責任。二千十五年に年間で約八万二千頭、つまり換算すると毎日約二百二十五頭ずつ処分されていることになる。保健所に收容される犬猫のうち、二割が飼えなくなって直接連れてこられた子達で、残りの八割は捨てられたか迷子になった子達だった。迷子になっても飼い主の連絡先が分かるように一センチほどのマイクロチップを首の背面に埋め込む方法があるが実際は情報を読み取る機械の普及が低いなどの問題も多いのが事実だ。殺処分の数をゼロに近づけるにはどうすればいいのだろうか。

一度飼ったペットを最後まで責任を持って大切に育てることが私達人間に出来る最大の対策法です。それでも、どうしても飼えなくなって保健所にあずけた場合、保護してあげようと引き取りに来る人が殺処分されてしまう期日に迫っている犬猫を優先的に引き取ってあげて欲しいと思います。もう一つの問題として、保護された子の中には性格や健康上で引き取り手が難しく、処分されてしまう可能性の高い子をどう救うかです。動物病院の先生でこういう子のお世話をしてくれそうな家族に情報を提供し、実際に引き取り手となった二組の家族を知っています。新しい家族と先生が連携をとって見守っているそうです。そんな一方で捨てられる犬猫も後を絶ちません。犬猫はどんな思いで捨てられてしまうのか。大好きな家族に捨てられた子。何もわからず怯える子。ガス室に入れられた子。あなたは考えたことがありますか。世の中には、簡単に捨てる人。犬猫に虐待する人。そんな人達も沢山います。犬猫も人間と同じ「たった一つしかない、大切な命」を持って生まれてきています。人間の手で大切に守ってあげて下さい。

私はくうちゃんを育てて、毎日楽しそうにしている姿を見てとても嬉しくなります。一匹でも多くの犬猫の命が救われることを心から願っています。そしてこれからも家族の一員になってくれたくうちゃんと幸せに過ごしていきたいです。

そうすることが、犬や猫の命を救うために人間ができる理想の姿ではないでしょうか。